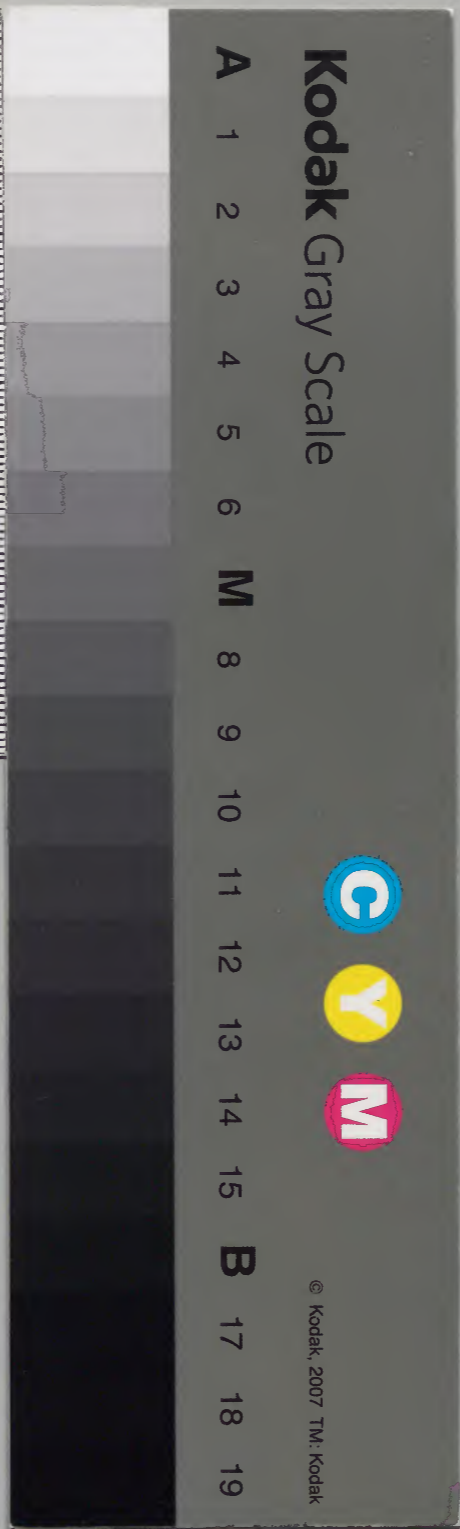


雅言集覽續編 卷二

一	二	三	四	五	和書門
冊	架	函	號	類	

八	八	和
函	四	書
一	一	
五	四	
架	冊	類

內閣文庫		
番號	和 18444	
冊數	15 (7)	
函號	208	39



雅言集覽見續編卷

之四 葦文庫

保田光則著

木の部上

後賀を年よりみな

にまて老乃よにうれきこと

神垣尔

おのの何

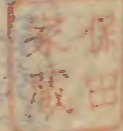
つんとを思ふの老のうけ

浦ちとりなれば

よの月の老の波

のるれまを年も老乃波はねをなれば

坂まがきさきに様をつらるの老の涙



くまれとや老れ渡ふ整りけむ若よりこる
秋乃よの月の老のいのち **猿拾** 桂香公豪
にぬハ秋と整りてぬるともおいの光ち成
いづたのまんの老の春 **風** 旗上為ね老香
に松あくううううううれ老れ春ともこを
はおもっての老乃友 **新子** 旗中為世もま
よもひとうおきあてまともうまぬ老れ友とハ
月をうんうれ老のお **猿古別** 志りきり
きたこの満活袖ひちて老のわきまにかさこ
のといの老のうさし **猿子** 春上 海一条入道
天うさめあらぬ山路をぬつて老乃まじし

此意をみるうれの老の數 **古** 毛壽 老の數さ
やよけれハ **風** 旗上 雲雅 才のうハ 糸 穂る月
日もしつうり糸老の數そふ年れハ糸年の老乃秋
同 春といハ ば若くハ こそ 喜みハ 老れたもと
糸やとも月かけの老乃つらハ **拾玉** 六 天の
代乃つらぬ糸年れ友とならん老の使ふなり
とこたへての老のつらさ **猿拾** 秋 若内大臣
静うなる秋のぬえれ才にぬくハ老のつら
さもあらぬさうましの老のぬかり **玉葉** 五
法印 夕輝 一ハ 一ハ 乃 夢 現をそわきうぬ
る老の眠れさむるようなりハ 老乃ぬさめ

に「餘材抄」云々奇ハ下の難上の奇に老らくのえ
とありせハ門きしてとよ奇を思ひてよまねる
にや四十より老の始なれハんといふなるを以り
按「儒書」にハ五十を老の始とせり「礼記曲礼上人生
十年曰幼。学二十曰弱冠。三十曰壮。有室。四十曰強。而
仕。五十曰艾也。老服官政。六十曰耆也。杖。七十曰老
而傳八十九十曰老。老なきを曰おのすさひ。風難上
若原為書也。は陰月にも程をなれ塔るぬら
まぬまの老のすさひ也

おいいらる

琴老癡る也

美菜上六禪法めのとなと也

くの老いらる人ぞ **柏木** コナウ おいいらる人
などハ

おいなこ

畧 なるハ年次の次も同くや
く老りをいふ方四十九より老く

まこー物を老奈美ふかる意ハハ家ハあ
るかも

おいを何

のおいをいとも **續古** 難下 信実
難信 程志ハハ老くをいとおよ

いとおいをいともぬさるなりけれのおいを
いともぬさる **新拾** 難中 若原成友 つひまゆくさハ
ありともぬさるハハ老をいともぬさるぬさる

卷十三 天なるや月をれぬ午・夜思つる君をひきた
に老落^{オハラフ}悟もくすあるか付詞の正しき年て古
今集に「櫻葉ちりうひくもれおいらくのこん
とありせハ詞きしてな」とこたてあはき新
成たともめりるは上つ世の別ひきまにせした
光則曰古今の老とてよある語也
うひとれと程きすうたに法別ハ破れきうき後世
ハと老といふ事をおいらくしよめにやん語なり
けんくハ一くいハ一方葉を来によあるぬく用
の詞とてよむ「ま」を中考すうおいらく世な
と俤になしてよあるハはくらくせさるもの也
が活らえて俤の詞とけりよううつりて

後世にハかく誤れる哉一凡て活らせて申さる
ハそ人のカホまのす「ま」をたれと本の命を踏
とそ人ハ「ま」といふ「う」すう一ハは詞お
いらと上よりして詞の條理にたひりたる
せけりそハおゆらくといはて「らく」に文る
あたりのなるぬ也由といふを俤に通しせば俤所
詞と成る経緯の帯也これハ思おによつ世れぬ
くおゆらうとあまふつはてあらハ後世にて
もかくとハあやうら一おいとよもけらうつ
いかにやハ俤の詞とハ思ひはてぬるおこえといと
くちを「ハ」誤り程き結集にももろをたに

おいららひーおいらら〜と人にかんえすなり
おいらら〜とええ〜りり

おいらら

又思ひくらつをるまゝ只く所をるえ
いり材くらつをるハ類の字に

て折折るの義来

少女

ウニハ老らつをれ〜り

ん人乃や〜にものや〜来との終〜

おひそけ

禁老殺成

は某日記

下廿一オ人にか〜おひそけ物

とみ落されおけ〜とハ思ひ付事と

おひそめ

老て身の腐る也 某は某ニ老がよ
りて室の外にもよかです〜と

たれハ

おいらら

吾おとなあふ也又尋常ジンシヤウに又手短

う。無造さる

細

まことになり花音

ものやかになり

帯木

柯ナ七いとがらておひ

らかなりま〜のハと

同

ウコ卅尋常也おひら

かに鬼とこえむうめらめ 某菜上かく安の

らぬあゆ〜きこえ若〜けれ只おいららに引摘

な〜てきぬウ

丹

解九四

〜こ〜ちうん〜ち

〜ておいららに云〜

おろす

女の墮胎するを〜俗ルおとすと云

是也

元輔集

男の人此國〜もか〜

お子をたれりける女のたうちをたれうけるはと
をもちあらすうていゝにすてしかりのうひこえ

おろす

制止する也

少女コウあさましくとどめおろす同す同す同

うにてもまよおやしのしる者ちちてめし
けれど

おろす

置今下なり。母代のたれおろすハ松川
おろす代れうもたつらすきゆ
物たたふなりけり万廿上廿九なふはつにみお
するやそかぬき今ハこまぬと妹につげこえ

おろす

風ハ往カキ名ニ山おろしおろしの風なと
幸ハおろしハ用言にハ新拾小倉

おろす

山ホこれお葉のくれなるハ葉のたれおろすな
りけり

おろす

本ハ竹の枝おろすハ竹ハ竹もいす
万十廿八喜柳の枝きり竹喜之中た
ねおまゆしく君にたわさるも
愚カハ名の詞たれハ美隊のちを徒
らうすハ状ハ鋪ハ状ハの詞のハ徒下哀
さいらともひのこえ

玉鉾百首

をちちをまうす思ひて神と

人に接すといふおろろ

おろろ

おろそかのま成ハ

牛 解一廿 おろかなる人ハやうな事

ありきハ一ハ 解一廿 けりとしてこそせあけり

同 同廿二 くら大ささと喜ひまゝ志おろこの

たうす 解一廿 早一てのくにくかたけなめる

程をおろかお思ひまなつ 解一廿 早一まんまに

ん 解一廿 まくらみ人とちさせ 解一廿 了を

ろ 解一廿 にも思ひし 解一廿 えさせ 解一廿 一 解一廿 上

さいのう 解一廿 乃古んおろろに思ひし 解一廿 えさせ 解一廿 了

れ 解一廿

おろ

禁おろそかにや今後におろそかの
つもりに 解一廿 侍らん 解一廿 宇治抄 解一廿 遺に 解一廿 翁の誓

もはけて白きとそもおろそ 解一廿 び 解一廿 と 解一廿 一 解一廿 一 解一廿

宇治抄 解一廿 三村と 解一廿 け 解一廿 して 解一廿 そ 解一廿 息 解一廿 の 解一廿 志 解一廿 た 解一廿 に 解一廿 ね 解一廿 ろ 解一廿 一 解一廿 一 解一廿

ける 解一廿

おぼす

四返活 解一廿 の 解一廿 お 解一廿 び 解一廿 一 解一廿 一 解一廿 の 解一廿 約 解一廿 め 解一廿

万九廿六 解一廿 三諸の神 解一廿 於 解一廿 波 解一廿 勢 解一廿 流 解一廿 は 解一廿 つ 解一廿 せ 解一廿 河 解一廿 を 解一廿

之 解一廿 絶 解一廿 す 解一廿 い 解一廿 君 解一廿 忘 解一廿 れ 解一廿 め 解一廿 や 解一廿 同 解一廿 十七九 解一廿 山 解一廿 背 解一廿 の 解一廿 一 解一廿

此 解一廿 都 解一廿 ハ 解一廿 喜 解一廿 ぶ 解一廿 ん 解一廿 ハ 解一廿 花 解一廿 咲 解一廿 を 解一廿 り 解一廿 秋 解一廿 ぶ 解一廿 ん 解一廿 ハ 解一廿 も 解一廿 一 解一廿 一 解一廿 一 解一廿

ひ 解一廿 於 解一廿 波 解一廿 勢 解一廿 流 解一廿 泉 解一廿 の 解一廿 川 解一廿 此 解一廿 上 解一廿 つ 解一廿 せ 解一廿 に 解一廿 一 解一廿 一 解一廿 同 解一廿 十三下 解一廿 廿二

あーゆく雁の翅をさることに天の佩^たあたるや
し思は申

おります

四所活の家所^{説消息文例上冊五丁に見申}なりかおを云ハ天^天新

一本院のふれ方乃清才のわらひ名
を大つ舟と云いよそりけり場或院乃こつと
おをりけるに^おい^いま^まそ^そり^りけ^けれ^れは^は積^積て^てな^なり
ける新ふれ年ハ一ねを持津乃池の玉もハ三つ
へりけり同先帝の時年大長乃如法上此
清局にまゝおをりけりおはし^おし^しま^まさ^さり^りけ^けれ^れハ
中約のふれろにおま^まさ^さり^りけ^けれ^れハ
ひらら^ひら^ら一^一本^本君^君約^約宿^宿乃^乃は^はま^まさ^さり^りす^すと^とま^まぬ^ぬ時^時年

光孝^光孝^孝も^も悟^悟ま^まぬ^ぬ栄^栄石^石彦^彦ハ^ハは^はみ^みの^の持^持持^持し

おを^おま^まら^らせ^せし^しる^る衣^衣に^に思^思ひ^ひか^から^られ^れて^てま^まみ

さ^さぎ^ぎと^とも^も一^一如^如石^石神^神佛^佛の^のあ^あれ^れひ^ひね^ねハ

ま^まして^{して}ま^まい^いの^の程^程ち^ち一^一に^に清^清慧^慧と^とま^まぬ^ぬ時^時年^年の^のま^まも^も也^也

おはする 為と活同

牛^牛石^石 牛^牛の^の月^月お^おま^ます^する^る名^名て^てま^まく^く又^又お^おま^まし

け^ける^る名^名と^とは^は お^おは^はせ^せま^まし^しの^のバ^バ又^又お^おま^ませ^せで^で任^任

皆^皆 ち^ちや^やハ^ハお^おま^ます^する^る又^又ま^まま^まお^おま^ませ^せし^し浮^浮

舟^舟が^がこ^こお^おハ^ハお^おま^ませ^せん^んと^とま^まつ^つま^まと^と栄^栄屯^屯月^月

皇 おもすれど又おもせど 八 湖月抄少老
尔大宮の清安乃始ちなげなるを おもす
朱だん 海もさると名い誤也一本尔おもせすと
考ぞ凡そ此例もけひてよきかくはと四候
にも活らけり

おはすて山

葉信濃國文科郡にき祖母控
山成下 襦室義経にしよ童老

國の意也伯母にあらしを名抄尔の款を姨の
よめりとしそ名の冠山といひ一由記せりれ
とつ冠う山音い南西に立ち仰けり奇の意い
里を勝母といひて車をか一 盗泉の水をの

まさりし君子の情あ一されハ磨めかねつ
感懐のしし清くこそ山家集
おは控ハ信濃にけねといつとも月住等の
名尔こそ有けれこハ大和右様郡に名と云り
古 雅上 我心磨めかねつ文科やはは控山に思
月をいそぐ 林 祖母ハおは伯母ハおはのあは也
今かなをほとそそ伯母控との思ひを本を
忘れたりそらてハ古依字の正しきをを
る(まことわりを云一)

おはす

四候
うつは 構を おはせりし又おは

教也三心の邪悪を云心の鬼と云つる是なり
四の地獄の餓鬼又獄卒の鬼と云佛家に云
教五の女を言りて云拾 陸奥の安達郡原の
馬塚にねたてしれりといふまことこの
いせ物 蘇我待おひて荒たる宿のうれさきハかりに
おにのすさく也けりと言めり教也六の天地
の邪気疫癘などを云追 催おにやらひと
の教也追催は疫鬼を逐^{ヤラ}るなり **新六帖**
茶のくれ 家良 百歳のた宮人 をもて
ておにおににねたてけり **新恒家集志**
すのつこもりのおの鬼を 鬼すらし宮人の

内とみの心をぬきとてこいひ人ふゆらん
七八人を食ふなといひ習はせる鈴にもなる
やうなるものもき次めのお又魑魅魍魎天
狗或は幽霊の人ふ崇をなし 狐狸の化て人を恐
したふらうすの教 **いせ物** 新六帖先遠くおに
まにけらおにをふらうりて云く鬼はや
一口にらひてけり

おは何 大の詞古くは天皇又皇神など上
のい添て申稱詞也さるをこ轉りて
海おはさらぬのふも添て送りいとの後の苦
にいさう、轉りて何すおも少一が一つく

んえぬ也 **常** 友

たそうれ時のおほく

おほ口の志神系

難波考一冊八云崇峻死
尔始作法真支此地名飛鳥

志神系亦名飛鳥廿古田と云え又万葉集二冊三丁

如日香乃志神系系尔久堅能云々と云ハ天
武天皇の市陵此法るなりを書紀尔は法陵
を葬于大内陵と記され諸陵式尔も檜隈大
内陵と云なりを按に万葉集の大只大内の写
誤亦て大内乃志神系にハ傳らしう云く

おほろけ

おほろけと云は詞の
おほろけと云は詞の
おほろけと云は詞の

丈夫之去詠云是若凡可尔念而行勿丈夫
之伴と云める妙凡可なる（一）上ら若にハお
ほろけと云めるハ云す後若にハおほろけ
のとい能て云ますなりぬと可の計ハ通
ひさるにていつてかく新古のおとハ成ぬら
ん後若にてハ保も一計も一必得りて云
也もと凡ハ大凡の心ぢれハ保も一法下を
へく可も一も又法音成（一）と云えハ
と古より此神也に此鈎者游煩鈎須ハ鈎字
流鈎云而とあるハ游煩ハ即ち凡の心ぢれハ
凡可も後若の如く保も一ハ程濁音にてそ

よめりけん可ハ必ずむ(き)也 雁字をおぼろ
とよむよりおぼろけを統率多也と心りらおな
ま(き)の(き)より上つよにおぼろに村は(き)おぼろ
おぼろをなとさあ(き)によつるも考け凡可の家
て(き)とむ(き)方おき(き)の(き)也(き)を(き)く(き)
まのた(き)ひて(き)おら(き)る(き)多(き)き(き)の(き)光則曰
け(き)の通り(き)て(き)る(き)在(き)状(き)に(き)違(き)う(き)長(き)深(き)う(き)と(き)る
を(き)芝(き)状(き)に(き)違(き)け(き)る(き)の(き)と(き)け(き)る(き)と(き)い(き)ひ(き)芝(き)状(き)鋪(き)状(き)
乃(き)早(き)ある(き)意(き)一(き)から(き)を(き)れ(き)も(き)一(き)を(き)ち(き)に(き)建(き)時(き)ハ
早(き)れ(き)意(き)一(き)た(き)と(き)し(き)り(き) **玉葉** 意二(き)う(き)ね
き(き)み(き)た(き)れ(き)の(き)さ(き)を(き)れ(き)時(き)此(き)月(き)較(き)乃(き)お(き)ぼ(き)ろ(き)け(き)ち(き)や

おぼろ 新古 意四(き)三(き)馬(き)清(き)哥(き)あ(き)よ(き)
と(き)残(き)は(き)つ(き)ら(き)に(き)み(き)ち(き)一(き)月(き)の(き)け(き)乃(き)お(き)ぼ(き)ろ(き)け(き)ち(き)や
やは(き)あ(き)り(き)れ(き)も(き)も(き)思(き)ふ(き) **指遣** 意三(き)と(き)み(き)人(き)ら
す(き)あ(き)る(き)片(き)わ(き)れ(き)月(き)の(き)く(き)も(き)ら(き)く(き)れ(き)お(き)ぼ(き)ろ(き)
け(き)に(き)や(き)り(き)人(き)れ(き)こ(き)ひ(き)し(き)き(き) **意高** 意二(き)う(き)ね
あ(き)り(き)れ(き)を(き)ち(き)る(き)も(き)入(き)月(き)乃(き)お(き)ぼ(き)ろ(き)け(き)ち(き)や
と(き)を(き)思(き)ふ(き)

おぼろ 漏(き)を(き)よ(き)め(き)る(き)。お(き)ぼ(き)ろ(き)を(き)延(き)て(き)云(き)る(き)也(き)波(き)
の(き)約(き)め(き)は(き)也(き)む(き)す(き)ば(き)れ(き)を(き)結(き)ば(き)れ(き)と
之(き)と(き)同(き) **古井長** 波(き)の(き)志(き)わ(き)ち(き)や(き)お(き)ぼ(き)ろ(き)れ(き)ん **後別**
さ(き)ら(き)い(き)よ(き)と(き)お(き)一(き)時(き)亦(き)以(き)ま(き)せ(き)ハ(き)我(き)も(き)波(き)を(き)お(き)ぼ(き)れ

紫日記

軽芳におぼれくる女房源氏

おぼれたる涙 葉云惘然をよめり覺のほれ

る義也

神代紀下

卅才兄自没溺オボル

おぼし

葉おぼつるなき意なる一 按万葉に按身、按身、悞不明、不漬、なとかける文字の意也。大欲。と云一ハ借訓也。万十一

夕月おあるともや、やこれおぼれ志くみ一命

急にこひわさるるも 同四 妻白山能るる云

此おぼれ志く一よりぬ人おもひあるものなり

同十下 おのつまをひとの里におきおぼし

くえつ、いそぎぬるけさの留 同五 たらち

の母の目みす一、おぼししくらちむきてる家

おるらん

おぼれ

葉 畧 おぼれそに也

万 二 卅九ウそりぬおぼれつの子のあ

ひあるに按保爾見一ハとそくや一き 同

三 五十八才 教大君あゆ一らんと思はぬは葉

おそえけるわつ山の

おぼれ

畧 又下二 畧 這廣にれるをいふ

万 十六 三五 うちの本にまひおぼれど

れる 本卷

おぼれ

手習 髪の手

乃倅尔おはとれしる

おはどか

在状 **様** おはどまの同詞にて大やに也

おぼどく

四長 **吾** 穂なる心の **格** おぼどく

おほやしれるまににてそ内にも各しりおほ

を **そ** な下 **コ** 平 **コ** う何るも只おひらかひ

おほと **キ** さらさ **キ** して **フ** 布 **コ** 五 **カ** うちを

か爰おほむどま **そ** やか **キ** して

おはよえ

梨 大凡をよめり又大と凡とを道
志きり **凡** 河内大河内とある

うみー大都大概大底等同一紀に大造をよめ

り義同一の省きておよえとのまも云り

後 **志** 四 **拾** **志** 二 天の名のたつにとのれき

才なりせいおほよえ **キ** なりてえま **キ** や

風序おほよえ **志** 八 **志** の色に志をよめ

新続古序おほよえ **志** 六 **志** の志秋をたけ

迎へてれのまぬのた夕に出りつ

おほよえ

大匠なり **記** 傳 四十三 **三** 匠の
中 **此** 長 **ナ** なる者 **志** なる **ナ**

松落葉 **一** 大工少工ハ木工の長の職の名也 **按**

大匠。将作大匠。大工皆同職名とす **中**

記下評袁神命歌曰意富多美袁遲那美
許曾須美加多夫神礼舒明紀以書直縣
為大匠孝德紀即遣將作大匠荒田井直
比羅夫立宮堺標今義解職負令太宰府
糸。大工一人掌城隍舟楫戎器諸營作事少工二人
掌同大工

おぼつな

格 凡ておぼつなとく又んも

となくなといふてハ後考な
るに おぼくし下 帝 大い格にハおぼつ
なとく 怨めしと 思しこれと 方ハ十三名
のかも此ものを色は 妻山乃 於保東無もおぼ

はゆるかも 同十上 妻さんハ本おぼくし
夕月おぼくし 山陰に於て 同八はよらの
於保未なきに 刻々を 乃おとのえ
るげき 古妻上 ちこち乃とくしらぬ
山中おぼつなとくも 学もる けおを
にハ小格の説けえす 古言法 澤考云物の
ゆらなるぬ也 万葉に 於保悦の字を おは
つらなる 又おぼし となとよめれハ ぬら
すらえなる 這合点の ゆらぬ也 正 抱の
おぼくし つかぬ 一乃 詞と
なれら也 堀百 産ら 妻妻 一 海

をこめつれハおぼつうぢーやあま乃翁丹

おぼらか 多らうにて俗に決山ツクシにと云意

字治抄六五飯酒々々おぼれとおぼらかおして

おぼらん

兼久記上十九才日本國の侍を考ハ三年の大番と

て一社の大さうと出立即從春属に至ると是
を考とて下りしうともカおて下りし時手
つららみつらら葉々をそに掛らうははし

おて下りしを故後のあるせむひて三年を

六月おつめおらに隨てお死せられ諸人助

うるやうに計らひひきて是程は情傳へ渡ら
せむひて志を忘れさうせて東方へあらん

考云々

おぼん何

オホニ
おぼんとはおを考便におぼんと云
後おら省きておんと遊りた清と

本天皇又ハおぼなとお中す詞本を後ハ兵

人おとつあると云ころハ詞の本を考り知し
うる也清とのくあるも略也の清若郎 栄在月

宴 中助と長良と伊予けるハ太政大臣冬嗣

の御左郎にそおほしける同日少理の宮におと
の御左郎少ねにて敷敏とて
○御左郎 榮屯 月宮 此は法之郎にそおほし
けるを基強のおとくせ給ひて云く

何おほん

おほん何と云くまを累きてい
る也

大和抄ニ是も内のおほん

是ハ内の法ん宮
と云へまを累きている也

おほん

日本紀ハ大嘗を訓り古事集
に承和の御一云云乃御一と云え
る是也大執事と云云一日本紀

におほんともおほんにとも訓り今におほ
なるともよあり古ハ大嘗新嘗分たすよ
て今ハ大嘗と云て式に新嘗と云えり續
紀宣命に大新嘗ともあり山抄ハ踐
祚大嘗祭毎季大嘗祭と見ゆ礼祭統に
内祭則大嘗禘是也又云大嘗令此歌之後
冷泉院の時を始とす

おほんてこの

大和物抄云天子よつら
すえさせかおほん御た

大和物抄云

さちの國岩年の郡よりなれ
市御云く御多磨に志のあけり

おほやけをうたふし

格 おのの身にあつ

侍よりんゆて悔さすしく思ふる也此

おほやけに倅乃しやまきに身に預らぬ

人の上れるに抽妬するを法界の各気と云

法界のまに南れり **仙甚方** そはやま

もち **帯** おほやけをうたふし

枕冊子 湧ましおほやけ後たち

けんそく此心ちもろく思ふと云

の上にていふあん若しき誠は業日死す

おほやましおほやけ後とのよをうたふ

人乃しおやにふくこえ思ひかへらま

う 業益えそそぬ夢をけふハ公け後

うれたる

おほやけ **禁** 大気なすてなりハ助

と云うぬしと云り生剛お学ふハ負志な

しにて身に負ざる也 **後** 一上冊一是成す

し官しなとハ女ハおほやけをこそに

くけれ **本** 屋 写十二う 表や親にあらぬま

りておひ立路えましおほやけをせす本に

さりを大物屋の控らんさまにおほやけな

くともなとかは思ひくさざりよー^同 尊ハ
家と思ひ歸てあこの法々さく人を尊ハ
んとし給けるかおほけなくんをさなき
すうそさうらん法娘をいよせさせ給天
まあらじ^萬 世んやすくさちひて
おほそくのすまあるいせどと思つるをおほ
けれーとハ千 おほけなくくきよのため
におほやかなわあさうまにすくそあめ
そて^万 下コニウ きておほけなきさ
と思ひ絶てハ^堀 懐 匡房 風をよ
料そのあをおほけなくまのよふうす
とそ思ふ

覆を訓り

おほ

万 万くけおほけを安んぬていなハ
天う名ハあれと家名一をトモ^後 亮
をおほけのゆきのれまさくそを風ル
まのせー^万 五六十長。横^{ヨコ} 風の赤いのに覆
ひ来れハ^月 清下おほけつきゆにそなれ
昔の夕^夕 氏此字つきゆにそなれ
おほえなし^例 まま掛也

いはせどと思ふるを **栢木** コオカはひに何するも
おぼえんでおぼえぬ乃のさあらしのさえ
をける **帚** コオカかやよおぼえぬなるさ
なとに

おぼゆ

續拾 なをむれハ十の秋もおほえける
昔をさくや月ハうらん **長秋** なるさの
ハさゆりハ風さて秋ハおほゆるさり此陰
うれ **續古** けさハゆりしけれを来し方
此意ハもさありおほえやする **玉**

意ハもさえんさくはハもさくも **月清** ナルさの
ハおほえやする **月清** ナルさの
のさきよりハさけもおほえぬさて乃の
とさハハ口記憶のさ来ハ **風** かくやハと
おほえハハも **おほえ** けりすて人ハハ
てそあらま **し風** 秋 ぬらむれハさえぬ
るもなりのり月や昔のさハみぬらん
玉 意ハもさえんさくはハもさくも **玉**
てまハハ心に **おほえ** けりすて人ハハ
おほめ 最後恍惚を削り **新抄** いや
あらんとささるさの詞也

天下の賜き者に限るめくなれども
御に非ず天皇の治上より貴人を以て押並
て公民と云ふこと也
記中 廿七ウ 茲二女王洋公民故宜使也孝徳
紀凡國家所有公民大小所領人衆云々

おほみこと

万五 早九 好去好来哥 天下奏たよひし家
子と撰ひ給ひて勅旨大命いよき持久唐
のきき境にきいさしおかりいよせ 續紀
現御神止大八嶋國所知天皇大命 良麻詔

大命 平 集侍皇子等王臣百官人等天下公民諸聞
食止詔云々貴支 高支 廣支 厚支 大命 平 受賜 利
怨坐 豆

おほきし

おほし

おほ

山口榮下 九ウ おほ

し。と云詞を。漢字にあて、見るとおほきしは
字にとにあり。おほしは多字にとにありや
也。おほしとともとおほしとおほしとおほしといふ
河も程大字にあり。おほしは古語に少からず。
折小少の字にあり。河にむらゝるおの大字に
あり。河凡三也。一に、おほ。二に、おほし。三に

ハおほきし。比也。おほはをにむらゝ河にてまらふ
大木の二字をねほをよ云にあらつゝま也又みすく
なにあらつゝもろをハ大木二字にあら也ねほし
こしきと云河にあら。又すなきと云河にあら
て大木の二字にあらおほきしハちひさしと云
河にあら河にあら。まらしと云大木の二字にあら
云。今省きての字にあら。按此河を芝状也ねほきと
を省きておほしとあら。ねほは本也。

おほしーまら

佛神も許ーカひかんとおほーまますにハ

おほーまら
今生立也志ハ今字のま まら来下

おほーまら
女こをおほーまらよいと能の

おほーまら
拾衣なよけの象子此成

おほーまら
ハあらすとしておほーまらつと思ひける

おほーまら
命言也 後拾 雜四詞 後二条院

おほーまら
同日五河 後一条院時云一祝のあらあま

此ををいれてならせ給ける御返一々仰と

にてよき傳ける同 日六 詞 後三條院時抄にて
日吉此言に御幸傳ける事未述に...
方仰ことにてよき傳ける 詞 喜詞 新院の
仰ことにて百... 後 雜二
逆長時時抄をきりてき仰こと承りれる
くおきける 同 旅 忠の流と云ふに法皇お
ばりま... 仰ことありて 古今 上
二条の後れきおあふ百ておはせことある
詞に

おはせ

紀に命字をよき續紀カ集集に
も又仰と云ハ異体也今仰字を用ふ此

存の流より用ふれりと 古 雜体長 今もおはせの
下れるハ

おはせつか

課役の二字をよき紀に又エ
ツギともよき記亦ハニツギエタ

千と訓りエツギハ役課亦て字の呪亦拘らるす
よめり也 櫻日月とあたるをツキ七を扱とをた
るをヨルヒルと訓るかめー おはせつか
科せ役使也 ミツキエタ千ハ下より上に
うらも也 課すハ賦役令に凡調絹絶絲
綿布並隨御土所出正丁一人絹絶八尺五寸絲
八兩云々田租ハ田令に段租稻二束二把町租稻

二十二束云々などやい何程なれと上下り科
世付らるる也ツク後ハ賦役令に凡正丁マシ歳役十日次
丁二人同一正丁マシなど又えりり此外防人オキモリなど
に新をもエタナと云へり記傳廿五ウ課と役と
二丁り云々民に科オホせて賦らしむる物を凡て
課と云也又田租をハ除きて餘を課といふる事
あれとまづ考にハ田租をもこめてしり

仁徳紀セオ自今之後至于三載ヤツテ悉除課役息オホセツカフ
百姓之苦タシ記下タシ悉除人民之課役タシ

おほす
四辰 今生也 考のおほす志たつと合えし
万十八 まきおほす 同廿 などでつ

おほさん 又買のおほせる 六帖ニ又六などで
おほしー 一つは 一つの村者 などで
ほす松の林 一万十下四殖生おほし考オホ十五
廿一ウ 乞日よりハ髪をおほ生おほ一カひておほす
世

おほす
下二辰 今負也 本おほすとしおほ
をばをばに轉していふ也及ば
す潤ほすの類と同一但おほすといふは續
紀万葉祝詞尔ハ於不考と考又續紀万葉に
於保考と書る不考と命オホヒの字乃亦に吉考オホ材
尔んゆ命世七令負乃考也とれは世の

方三十一万三下一酒の名を聖とおはせしに
一のおはきひりりのこと此より一後
難おをしと思ふんはなきてはたひゆく
言にむちをおはせつる年是に鞭打るを
いり鞭打馬のうろの方より打バ合負乃
言もき拾お旅ゆけハ袖こそぬうれも此
素にのいハおほせさうれ正同難去素白
此秋のやけ系あるともみえぬあまな
をおはすなま系古素下そせんころだ
ばおのう羽風おぬを誰におはせてくら
鳴らむ紀一廿二ウ即科素素鳴る平座置

戸之解除イハハ云々同一廿ウ科オホセニ罪於素素鳴る而責イハル
其被具ハツミ記上廿六ウ負オホセ千位置戸桐壺十八ウや
まとさしを おほせておほしよりおほす
ちをれハ云々注課試とつらきて試る事也
命を訓り又おほせとあるおもを
古言材ふみゆ合負と素同古廿長
末の世此あとも今もおほせれだれ
ちりおつけとやちりのいふ云々土佐日記下
みおねよりおほせたおなりあさきたの
こぬきまにつなてはやひけ後拾遺程三
詞わーかおほせりおほせりおほせり

を中て **後拾** 雜五詞その内返りし身をもめて
あらせよとおほせらまじけれハ **家**を返
おすとおほせられて許されおけり **同日詞**
名にの申さるるをよめのおほせをけりハ
古今 雜上詞これを歌ふてあよめときを
女人におほせらまじけれハ **俗**におほし
兄弟又姉妹をとり俗におほし
と云ふ日本雜名中ニ兄弟兄をい
おとこ
と云ふ。と訓て云おとこハおとこ也い
通すえハ兄也 **オトコ** 兄也 **光則** 梅にけ説の如く
ハ假字と云ふりえをいふ通ハし又いふをひふ

通ハしと云ふのま譯 **邪家** 弟日僕是也
万 一五十二番打あられ松系すみのえ **弟日**
娘と云れと何うぬ **おとこ** 可也 **おとこ**
おとこ
雑 語考 **六** 云 **弟** とハ若と
いはん **兄** のま **おとこ** 也 **あらん**
兄ハ才福姫才財郎女なとをゆめ **おとこ**
々の皇女たち **おとこ** 日 **命** と **終** たる
多かるに **おとこ** 才 **おとこ** 坐 **おとこ** 北 **おとこ** 著
比 **命** 若 **郎** 女 **命** 中 **おとこ** 同
さまの **終** と **おとこ** 傳 **おとこ** 也 **おとこ** 終 **おとこ** 終
むすめ **おとこ** 若 **郎** 女 **命** 終

婦のまことしてよく叶り 記傳 十三、十六、弟

柵機之なりかくさまにソおと人の季子 スエノコ

をおとこといふそおと也さて季子ハ父母に

殊に愛まる相あるにそれより ウツシ 轉りて

少しも季子ならぬも貴愛まる言ふて

なして美女たむむおと来とそひけん此

も能なり

記 上五十三 阿米那流夜流登多那波多能

那賀世流云 紀 二八 阿妹奈屢夜乙能

多奈波多通云

おとひめ
義上尔又ゆお編をの部尔出
せるハ偽字速り又をともめと

同ーと似るもわろ

おとやま
記傳 五、廿 おとハ下処のまこと

七下る処をあらとて云也

記 上 次於胸所成神名流騰山津見神

続紀 十八 出雲臣弟山

おとむすめ
弟娘亦て季女を云轉りて
ハ廣く若き娘をい云る

上おとたなばたの糸に流語考の説を

挙るをえよ 律 我門尔三段云

のふのやみそ此ふのあやめ此歌の太リヤ
のまを娘と云いおとむすめとこそははめ

たとよめ

弟婦ふて季子の妻をいふ是も
うつりてハ若手よめをいふ也

催馬樂

呂葦垣三段とろけるは家姓

家のおとよめのおやにまうよこしけり

志也

おとと

男此才のこならす妹をいふ

大和一本院のふ乃方此はおとととのわら
ハ名をいふはのやねといふはまそかりけり

同三故中務の宮此云くの乃お此方のはを

けり九の天をやうてはかんとおは

けり古舞上めのおととと成もてけり

けり人にむせ里 中はおとととの三は

天 そむお
里なり

考を列り 名 おとハあたさ也

たと

あたとたとを過すのを畧す

凡拍乃拍にあたりて春の出るをたと云

琴 万葉に春もよりのみそ乃おと

古今集秋上にも秋を秋をまうりてあせ

て鳴菰のみにいひえすたておとのさやけ

とよみなりしつとなくありは悲情非情に渡れ
たれとい悲情に限るやいふたれりといり
[芥子園梅の意さける園] 尔家をれはきし
くもあらすやきれはききをこゑと訓
る本もあり [同五ノ廿七] いくひすの旗登き
くをいふ梅をゆきしは其のたききしてちるみ
快

たと

考と付よきて考つれ考をよき考
を又考とよきて考信のこにも

よめり [新古] 意三中や以らにういふのたき
尾よびし松に考すら考あとい [續古] 意三山

意ハ着ふるたふしき物を考せぬ人を竹
う若しき [続後拾] 雅中 山里いといれんと
い信神し考せぬ人を何処むらん

おとろ [材] 忍ろしきん又考くさま
いといり [柏木] コオ法す法

同 [コオ] 法うふやの像式いりやいおとろ
法強ちといとおとろいりさあまたり

おとろいぐさい并

おとろ

おとろ 中物ハ妹の天子むすえいすた

きん(きん)をうのおとーくんにせんとい
思ひける同かるをうにすーおとーゆ
えてはらよとをーてーりぬやといえんとお
もひて

おとーむる
下二辰

桐壺 おとーめそぬー **桐壺**

金志 俊彰 あやーきーも嬉ーうりけり

おとーむるそくのまにかると思ひは

おとがひ

々々方 丹十二下 九十六才 其座有 **有入** 頤放

テ咲ル

たとな おとなび おとな **榮** 木となハ 紀尔社を

よめり大人名オトナの美尔や美名何勢物語

尔長をよめりたとなびといひおとなしと

いふも是也 **成形図説** 一廿六才 大戸名ハ孝徳紀

二年尔村首オモトとある首尔オモトて名ハ主と通上云

又蝦夷の地ハ郡主地取と云者もたゞ一其於

於一村に於登奈と移るる箇長ありて子を

執れりと云於登名ハ即大戸名にて上戸の道

糸なる

おとろ

音信也と云流ハわろしと云ハ為十六
のま音ハおとろをハ厭ミハおと

音同ハあり凡

上三三オ おとろをハひくろ人モかた

なと一ツ

拾遺上秋の葉に流たハ凡の

おとろひよ

秋カ一おもひつること

記上

オ悪神之音如狭蠅皆満

おとつれ

おとつる

桑 名ハ世抄後ハ音
信と云ハり又消息を

訓せり

息耗音耗也とも同ハ音につまよ

糸なるハおとろをハり源氏にお

とと汁もる

至生上おぬと云ハり此鐘の音ハおと

つろと云ハり

後拾 秋上秋の

葉に凡ハり秋乃夕暮をハり此カ

人此と云ハり

新古 秋上秋ハ葉ハ葉ハ

音てハ秋風乃音信をハりつよと云ハ

後古

釋中ハ音信と云ハり

此音信ハらるまハり

新古 釋中

音ハハと思ハれハ松にのこ音信ハ

凡ハらるめ

新載 秋上 秋風ハ涙

僅中ハつよと云ハり此音信ハ

あふれに母にはなれ出たる也流るるを云

橋姫 おちあふれてきすりらんる

おちぢれ 下二候 梨零は落を云廿落魄も同
源氏おちあふるといへる略語成

へー 長秋 上 七さのるひなれもあふれぬ
ておちあふれぬへきをぬてせん

文集 安堵安心の事成も其落著たる意
なるもさる

桐壺 十七女侍もは心なる
おちる

夕小 標櫃 コ卅三いとくれくちおちぬ
後巻 十七オは心おちぬてかて

美菜下 コ四十五ウ まことのらもせのおひら

おちる けんとなん けり記下 廿少十人おきての

とやうにるるぬるを本としてこそ故も由

もおかしく後ろあけま 美菜上 のとた

おちあてたうく此よ乃例去後あまの心

ひやく物せりもく也 後 雅二詞書 昔甲

おにま仕一侍りける女共男につきて人乃因

はおちるをよりけるを決つけて云

おちばーて 玉霞 廿四ウ 近世また一き人の奇
余一は美菜してとよむるる

ひが言なり「糸糸」といふと「糸糸」
てといふ例なり「光射按」糸糸とて「糸糸」
下「糸糸」てなとよむ例見及らす

おりのぼり
下「おりのぼり」也
後「おりのぼり」平のなうき。
よとそに「おりのぼり」

ゆくまこれおりのぼり
おりのぼり
公忠集おりのぼり

のぼりこらうひもたし
白雲地山と糸糸

君やまふねは

おりのぼり
織女をいふ
後柏原院集おりのぼり
姫のまにともを新枕に色

このおりのぼり

おりのぼり
糸糸を云下の糸糸
おりのぼり
糸糸の糸糸をいふ
糸糸の本をつらに打立

て糸糸にてと糸糸

紀廿九
莫造 檻 及 施機 槍 等 之 類

おりのぼり
コひくすら糸糸也

おりのぼり
十三オ おりのぼりてせめ糸糸

と 葵 袖 ぬきこひちとかつハ志りなうら

おりのぼりこ糸糸つうらそくき **千** 俳諧

江信後 糸糸のうちハほく隠れても何ら

しておりのぼりに糸糸のこ糸糸 **獲古**

糸糸糸糸 糸糸のならん糸糸

妹世河おりにとちね(きんちのこ)して後志三
桶敏伴わひ人のそ居つておれる涙川おりに
とちてこそねれ渡りかた

おろ

下なり

士佐十二月

廿六日さきの書も今のも諸君に

おりに抄おりに八生岸よりおりに也

榮紀に妖偽又妖言などをより

およづれ

万三下

廿七

人をいひつるおよづれもか敵ゆり

つる狂言

同

四十七の逆言乃狂言とかも

同廿九 およづれ乃狂言とかも高山の山彦

れ上にあうやせ

およづ

及を訓り四所活吉言にハ志々と
いり志の教に也す

拾志四よの人れおよづれ拍ハハハ乃ぬ

れ志めに立ち思ひなりけり実本

すつらきれささしおをさるとち乃をたお

よのぬ枝に袖かけてけり六帖三十九才あま

軽なりあまの掬ささ浦原に及いぬ

志も我守る我

およすげ

は詞下之辰活成下と思つと此
みに活らさるるをえす

古言材 木いの糸見の人となるをとお
よづけと云老附也といとおよづけと云
しる事ある及す 禁にもおよづけと云
たれといひて **禁** 物語に多し 木と云
しるなる言也といひ及し 著の美な
るにや 活氏の抄に万葉集を引いて 助及
とありといふと 入る用りす 及次の美也とい
ふ 徒然抄に するをまよす けたる
染とええたり 又をの偽字にてをい

祭語。世づく成り 一と季。磨ハ云り 或

説老附と云ハ非也 **材** 一カ葉に助及と云

するなり 石の月と 亥時云り 詞の美祥

ならぬとおとなしきさま也

桐 コウウ **ばみ** コウニ成りふと 一少袴着の

る云云。それおつけても 出のそしりの
おんわれとばみこのをよすげもておはす
るは 歌あははしき 難く 珍りしきと云
えりふをえそねとあ 一カ少す物の心知
りふ人いひる人しよに 出おはする物也
けりと 活らさるるをえす

同

十九日

月日

五ノ年

御用い

よれ物ならず清らに

おま

けり

以てゆしおぼ

帛

三十七

なきおやをもまうけりけり

けりおきてま仕にせり

もそせり

の終りせり

以とおよ

おど

又

おま

ね

おまろし止由宮儀式帳に根倉乃御

伊勢家苞廿三三餘隨筆

おことし

刀代御田并佃奉豆と見え尾張の岡津崎の

津田より出り氏を織田といふも津田の由な

を思や一太清田法田をなともいふり

文雄梅お姓説宣一お御文字ももとおま

を省きておんともみともいふ云は

よりて思ひおねも吉説の晩稲の意た

いあらで大洗稲の意にておねと云は

稲田なる地の才一なれハ言ひておもし

くき理也といふ按御をおとよむハもと

大御と云たるをおまといふ。後考便

にたほんといひ。又省きておんといひ。又

省きてねと汁もいひ。み子もたの字を有
款で御とのこかける成

おそり

四后後世方下二后にのこり
猿紀宣命懼理ときけ外障弱志

なとも古六四后も活り土佐二月廿二日か
ぞくの**おそり**ありと以は後拾神祇

うつまにまやけきれ乃えぬれハちりの
おそりありとを

おそなる

四后活伊まと同倭廿二夕
べのおそなるは禮ぶに

と昔九十八ウ子とも女なと**おそ**つれハ

ねそなりつる同十一オるおほくして

おそなりつる

ねそよらひ

按ねそあひを延約めえ
へる也らハアとあの約ホてお

そりあひを約めておそふらひと成そ

やみの二重約め志と成故ホたーあひと

いたる也

記上

三十八ウ

なすやいとを**おそ**ふらひ

わがたせれば

ねそろ

鋪状思也千俳諧空人法師
ねそろトヤきそのかぢちの

を木指のみらたひにおちぬ(きぎ)

おそふ

四反 櫓を削り押覆の義成
へし志た反る也日本紀靈異記に
一壓七削りそふ反す也日本紀に
とおすひ
とこし御詔衣也

土佐

七反 櫓の穿つ浪上の月を二舟におそふ
海の中此空をととひひりん

おつろ

中二反 櫓戒を破るを云ハ古家
おきと人おつろぬ

土佐

正月廿日 舟更せちみすさし物なけ
れハ云々おちらぬ

○堪こらゆるのまくるをいふと者

廿三十箇 葉あきりお責問付けれハ落てるの

まへにいひてけり

おなじかざし

親類又同類をいふ正論
僻案抄云山お入人柴な

とを刈てておに立て麻にも人にいもえん掛
とがまふるをかざしといふ也と云ハ掛

糸て一カ葉にもよめり又奥係抄三云かざし

とい物するに麻お見えしとて柴なと
おておたにえり也同ハ何人ハいひておし
の内にてあつてもいふ也さねハ同一心なる

予にゆかり又山ごちなとも人年んえど
とてハたてろ所にかざりてをさす也翁人
陪後をとののさししと一ぬれものハ同花をか
さしぬまハけらふけ下り又かざすともハかく
すとゆゆる事あやま云「のざすともたぢ
ととちぬる年い名をりことなし」**料**乃が
ひいたらん彼物人七盗人七翁まんと
下するるなれハ付ひて「ゆゆ」**後**志四州
う宿とたむき程に美しいらハ**同**ド
し残さすハせめ**拾**権下ぬす人の
たつと此山に入ふけり**同**「さし乃各に

やけられん 権本 山櫻にけああり
にるふて**同**「さし」**成**おてけろを
杖衣とよまにやハ思ひ成（きとろ）
ら**同**「さし」ハさしともなれす
新葉 権上 ひきうけハ契かもらて葵
叶**同**「さし」の末そるけき

おな人

指邊 頃 おな人の七十賀ハ傳ける
に古志田 堀はこくたなきし少丹こま
ひり**同**一人年や志海うなん

つげまりぬか **初子** 初オまーていとうぶを
しけるおまへは庭より初見お多くうかきま
しむつるおんかすのきぬやぬいそん
もまじ業ふるましくなん **回** 初オ夕つ
おんかすのさむさしむんとして心ことに
引つぐろひけさすし終法かすこそ云と
桐壺 初オ初より我いと思ひあうりまはる
かすのましましき **抽** にましめをぬい終
空蟬 初オ壺より西の法かすの海らせむひ
てごうとせ終としよ **初** 初オ初より初
初オ初より初

おのづよ

い 抽廿一糸 といひけれとおのづよに
おけれはうとく **後** 初オ五
初オもとれあふぬか **お** のづよに
いたりすも **初** 初オ **胡蝶** ませの目
ぬゆくうとく **初** のこ **お** のづよに **お**
ひわうとく **後** 初オ **ほ** のまにあ
する **お** のづよ **か** ひあうと **こ** せ **お**
へら **お**

おのうどち

己の共也

葵 **い**でやおののち **ひ**き **か**て **え** **ゆ**り
ん **こ** **そ** **も** **く** **な** **る** **一** **ケ** **れ** **同** **人** **と** **は** **あ** **ら** **な** **む**
れ **わ** **つ** **お** **の** **う** **ど** **ち** **哀** **な** **る** **も** **も** **打** **の**
と **り** **ひ** **て** **を** **と** **の** **一** **万** **四** **才** **又** **亦** **思** **ひ** **よ** **り**
さ **り** **け** **る** **事** **と** **お** **の** **う** **ど** **ち** **な** **け** **く**

おのこ

おのこ **我** **を** **指** **て** **も** **い** **ひ** **他** **を** **指** **て** **も** **又**
お **と** **我** **を** **指** **し** **又** **お** **の** **れ** **と** **云** **々** **又** **お**
の **う** **ら** **な** **と** **い** **ふ** **さ** **なる** **さ** **あ** **ら** **我** **著** **す**
所 **の** **同** **を** **異** **に** **抄** **又** **挿** **取** **抄** **ル** **ハ** **挿** **取**

抄に三例有とす其例

○おてま(と)作するハ

拾 **志** **四** **我** **陽** **る** **さ** **の** **思** **約** **心** **あ** **ら** **ハ** **冥** **に**

す **ど** **も** **お** **の** **れ** **い** **な** **け** **詞** **意** **上** **風** **を** **い**

み **岩** **打** **浪** **の** **お** **の** **れ** **の** **く** **く** **け** **て** **物** **を** **思** **ふ**

以 **兼** **二** **例**

○ **我** **と** **我** **を** **指** **し** **又** **お** **の** **れ** **と** **な** **と** **作** **す**

拾秋

お **の** **れ** **受** **て** **や** **秋** **を** **い** **ら** **ん** **後** **手** **妻** **下**
妻 **居** **ハ** **意** **ち** **る** **ハ** **女** **め** **ぬ** **日** **に** **お** **の** **れ** **う** **ら** **ふ**

やまさくらがれ万 いや老のおのれ津さ

ひ天玄北だぢひく日すら小さのそぼあろ

新子 秋下 神老のおのれをこの北老道怨みか

ぬおのれかれゆく虫乃奔うれ 新後拾 終

後西園寺入道 昔つる情はうりをとまぢえ

ておのれさひき萩乃うい風 三例

おてまはうり。と任する

壬二 中 風あらず山田の庵に秋田からすこ

くやおのれ月をみるらん 新子 賀又 新後拾

秋下 山水に老せぬちよをせきとめて

おのれらうらふ白菊の花

おのれと

考いんえぬ詞なりと挿以抄に云
リ任同又我と我まにと云

新後拾 秋上為相ゆると人にまこれし涼志き

をおのれといそく秋の卯月 壬生 中

きぬのつれなくええし涉ちよにおのれ

と名ゆる松虫の聲 風雅 冬 後伏見院

沸製衣 困のや室きき船りの指やえおの

れと名ゆる松の白き

やの若菜

くら母あそきえんそら紙

たふす

後書系

紫白記

たくだし

たやの

も汁とありておやの家たけ

おいたんありのもしらぬ若菜をお

隠為也おん六字音なり

二十五すしもおくせす

口懐くそおくしにけれ取半

下三ツいおたくすらんと

大後病んお女

たの物も是れ之母

親の家帚木

可るしすしおん

も汁とありておやの家たけ

とこたく作り

たやのる

たふす

おふす

を細

るんり

そひやう

まふ得

胡麻 十才 ぶらあもすく子かにおや

のうらうらあはんやそふら

本二辰法〇佩帯等の字とあり

名名伊物 限分をこめ

おちとのおはあか

を細おはあか

い物 九言条おあま

そひやう たつき

まふ得 おはあか

はあか

を

行國武可絶

たこなふ 四段

たこなふ

下二段の被行なり
おこたふ、奉節也

云故に蝶のたこなふのとも蝶れあるまひと
ちり。○新敷に、修けれるをさう、奉節
れさたり、**紀** 允恭巻わかせこころい
りさかたにめくものたこなふのこい志る

たこなふ

土左 二月九日ふねいをなると
ハ 行ひつ **抄** 云言を要用をさう

新小義く

たこなふのたこなふのたこなふのたこなふ
たこなふのたこなふのたこなふのたこなふ

たこす

下二 **祭** 遊仙空座名伊勢物語の遊
をけり送こすの家へ借ふよこすと

とこす **抄** け何他、う、歌に物するをのこいて歌
うう人の物するをさう例末兄友ハ寸借をよこ
すも必人うのふのこいて歌うう人に物する
とこすまう、但借々の口唇に、ふ、記言をれい
す、捨違別流されけりて後いおせてけける
贈文故去長と見、後公み方にて古くいひつか
りしりまらとつふめくも、やれと是、古のまを
の方にて書たる、端号、こ、みぬ、の書るの
ち、す、他、さう、書、事、も、又、号、を、お、く、れ、り、の

方に書きもあつてさあぐなれりりくさひち
 めをぬにせすの速いぬし **枕**ニサニ物をもひ
 おこせりふ **後**二下十九日十夜いおこすれい方
 六ニテおこせしあまむのりもむ **同**十九を
 せたる **古** おこせたるける文も **後** 文をとお
 こする男 **い物** かーごりくたをり
 復た嚴字をこりあり雅よんがいつく
 ころく志いかの志のちとより

木こそか

木こし

木こし

通證九正頼
沅或讀若抗

旧事紀作沅毅。字見復漢蔡邕傳。同。並。龍象

智度論曰龍象言其力大水行中龍力大陸行中
 象力大故負荷大法者此之象龍摩訶曰象之上
 者名龍象也若依大論乃是二類 **此** 之の同義同
 活を鋪くこまをを負たして剛毅勇猛也 **此**
 梵字のこまを **紀** 四才志尚 **沅** 毅 **同** 卅請
 集三百龍象大徳等 **於** 飛鳥寺
 下二居 **祭** 推支の象ぬして後にいふ日
 本記に禁字をこりあり **夫** 仲正を洛
 木に記に **同** 漢人不知 移にきて急もあぬに
 まゆ **同** をたさの字もす急りし

木こそか

木こし

木こし

通證九正頼
沅或讀若抗

旧事紀作沅毅。字見復漢蔡邕傳。同。並。龍象

道にそりてふかぬ

たしなす

之和物 抄六けいみとおしりたるひける ちほいふにもあらそり

たしなす

おしなす

推靡けり方

のりおしなすひのしひとあててと云ふたし
みら後にふらふと云ふのころ也 万一 行長志と
と押靡 辰方の朝と云ふこと 同七 下三 しいめ
のゆゑのうきおし 糸倍ゆるるるに名ある今月
に懸く ともほは 石 冬 今 ころ かつきて

おらなりし 神宮のうきおし けみあれる 白雪

万代

後鳥羽院 社の垣のまに 何れみ

風は 月のそみかき 露の白玉

たしなす

挿路物に出信おし くらめて わけへたてて

たしなす

記傳 十九 五ウ 押機 いた志と 訓し 下 押

文に相見打而死と云ふ記に 踏機而 壓死と云

あぐんと敷て 殺さん 存に ころびて 又右を 踏
いらふ ころり 履入て 履死ぬ へく 踏く ころり 相見
和名抄 取擲具 嵐 誓り 一云 嵐 ころり 於之 七有 注

拾遺系北之押羊魚をけりし鳥の招呼ヲヒにせんと
 と梅へするオサ鼠ネズミ等あやの子れ鼠とよく今
 世にわたると云又処にけりてこぶちとも之が
 拙オシこをらをも仙童にしていさむと云記中六方
 其殿内作押機オシ符時云其内張押機符符取
 木山オシたすらに
 汗或流の敷に押流すと
 ひたすらにひたすらにひたすらに
 後拾遺四よまの思ふことありある物をか
 ひたすらにぬる神カミのれカミ長秋ナガアキ中つらさにも
 おりし後のそなたたすらにひたすらにひたすらに
 さらん

たし何

正 梓オシらおして毒雨と云来た云
 押オシてい万葉云又馬の口押オシ陰カミ因

六馬歩押止オシ程オシ存オシなりと云押オシては因オシも時オシよと
 新オシ小雨の志オシして夜日降暮オシせると押オシては日降
 ぬと云押オシ並オシてのことと云けりオシ難オシ之オシ万オシ七オシ春オシ自オシ山
 梓オシ而オシ照オシ有オシこの月オシの妹オシりオシ庭オシにオシとオシさオシやオシけオシりオシけり
 承オシ庭オシにオシ押オシ陰オシをオシ照オシやオシるオシ月オシ彩オシはオシとオシ云オシ名オシにオシそオシ陰
 照オシすオシとオシ云オシ正オシのオシ押オシ流オシ心オシはオシくオシとオシ因オシ正オシ因オシ止オシ窗オシ起オシ
 月オシ照オシ照オシ而オシ同オシ八オシ林オシ屋オシ戸オシ月オシ押オシ照オシ前オシ市オシ云
 上オシ梓オシらオシおオシとオシまオシさオシ雨オシとオシ自オシ少オシぬオシ明オシ自オシとオシ云
 ハオシ音オシよオシつオシとオシ云

木志つくる

糊りとして木をねはしけりてふ
繪を相ねはしけりてふを語りも押

繪といふ **世継相持**

平仲本院の信後立つれま

とさといひく文をせとありさやぬたわひて見ふ
とさといひくといやういふとさといふとさ
を切取て自ら取小押付てありまを

木しね

大佛縮の事やうの中木田の事いふ

木してゐる

後波の冠持にさるる波をさるるに
浪兼といふにさるる波をさるるに又冠持
サして後海の事いふにさるる波をさるるに **桑** 長撰かめ

後海を押照と云ふをさるるにほてまの義に

やとく **相** とも海の波をさるるに **冠**

辞かきぬ **堀次** 七夜 **昌昌** ありてさるるに **因** 唐人

まける考しや **伴** 実おしてさるるに **神** 愛路に

いそき来つらむ

た志あてに

工 推量に **善** 果 **ま** のや **桑** 笠

木ひぢ

桑 浮長に **田** 後撰桑に **さ** りて

のりさるる波の風をれい風来て **井**
いふ日本記に **順** 徳を **お** ひ **さ** りて **さ** りて **さ** りて

ちほ日記の奇も是く其年記の怪風をも引す

玉霞 サウ ふうのちから吹く風を船に指

てゆく方へ吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし梅のちから吹く風を「梅花

おひ風」といふ事とさういふ **伊勢家苞** 梅の追

風とちから吹く梅のうしろ吹く風のことにつ

をれいといふ事とさう **世系** おひ風の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

ちやとにたし吹く風をいかにて吹くし流すと梅の

玉霞

サウ

伊勢家苞

梅の追

世系

おひ風の

物産

山の隅をつま本のおひかせにつれと

後

後波かた江のあのと

三白番

性

又家記長おひ風はすたぐ性のもちを
波とくくするをその川あり 右方云云たう
追風に舟ありまはりや判る左の追風右
の中各可然い

おひ風

下二段 **万** おひ風をきてに **をき**

やとおひ風と **着** おひえさわて

下二段 **八** 物産文にねおひれをよ

のちて介に活たる事見え高らす

おひ風

禁

生波の家 **を** とめ方 **三** **四** **一** **ふ**

幸人の後のちのかねこそ又おひす

おひ風

柳

注に追手いふえすいふおひ風

おいさささ 筑れり 花園のふちから ほとり

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

おもひ返し

たのこ

い物古き思入思入と云こ
ちまゝと云古
思入思入

あけぬいめにみえぬをそなたたててはやる

い物ハ十六糸おのくともなをいあけぬあられ

せぬきめつあをそあられをい下と云思入

と見たりとせぬきあられをいあられとあ

らと思入は同思入ともたれとせぬあられ

の茶らぬ思入のあらしと云は同思入思入

あつたのたうははいと云あられをいあられ

ね方十一下下思入思入思入思入思入思入思入思入

をい思入思入思入思入思入思入思入思入

たのや

たのひ

思入思入思入思入思入思入思入思入
思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入

百夢にたにみゆとはみえり一物あしく持付には
了る身かれのされとそも実のま物を足るに
はあつて流に写りたる氣を足る故に流と之
るやうの勢舞と刀をささるるハ万陰奥のま
ゆ菅原をけれと西氣のてみゆと物を同
言園のゆへのうはま西氣にみえつて妹の忘れ
ゆ同九四三 之易月をさうてあふれとさね忘
られと西氣のて同 土里嶺と悪わひたけまを
流西氣さうす夢にみえとをい物めからお
もはえやうに忘らるる時をけれおもひけに
たけ 流後 悪三光孝天皇の流たえて悪三時

つれと西氣にこそはけれさうけれ 物松

軽上後伏見院 ころやいそ豊のゆめこの
ころおもうけさうそまの上の月 物後松 軽下

伏見院 数かれの十本松の秋かれと西氣
近き月を怨うと 物後松 冬軽をさうさ

つりる月の光にそ西氣わさるる存のしりさ
物後松 ま上 式子因物とさうむれいさぬ

下 一のま上と付うとる宿の横う枝 物後
軽下 涼を孝長別れり後の三年のまの月

物氣むお守を怨うと 物後下 軽上 流人ふ

妹の流形見の横のさうさうを付さうてあや

こふらむ **後松** 志之入之ニ臣状をばはり
 けいし **新干** 志上後山本前を長 志計さそむ
 にと志たく **新紫** 志上後山本前を長 志計さそむ
 輕上 經高母 志高れぬを志の秋の首志
 志さそむ **州庵** 雜海條
 方の山 **夫木** 基後 志けし志 志子を志るの志に
 志して今志の月 **おもた** 志の月 **おもた** 志の月
おもた 志の月 **おもた** 志の月

尾志海と志取の業断 志海志 志と志 志取志の
 百此志と志弘地 二年志年 志志を志た志
 志志せし 志人志と志て志志 志志の志の
 尾志海と志取の業断 志海志 志と志 志取志の
 志志せし 志人志と志て志志 志志の志の
 志志海と志取の業断 志海志 志と志 志取志の
 志志せし 志人志と志て志志 志志の志の
おもた 志の月 **おもた** 志の月
おもた 志の月 **おもた** 志の月
おもた 志の月 **おもた** 志の月
おもた 志の月 **おもた** 志の月

くらしやけおもたふたふたのめりききき十八十七
 にふたにありおるこころあるふつふたの太馬の歌な
 れおもたふたふたおもたふた太也ぬおもこかといふ
 いぬをさうああげてあう物なる故に肥るを
 捨ていひいひしをさる之豚をぶたとふふた
 り肥る鉄さるこりうを成しし今のこたに
 きたるんばあうし肥たうともばあう
 ともさう結白のくしやあうしやこのこた
 おもたし
 西目らしはこ
 今ほらうにつけていとあまた
 下三十四いとらうつうく西た
 下三十四いとらうつうく西た

く思ひゆえん治

おもねる

神巻記の倭姫を訓り

おもじく

下三度 さあうしにしいかすやうの
 心く復戸 コメ君をいみじくおんさ

いはおられさるさうたにあうがとおもひびけて
 めあにおはいうら **をこめ** 万五いひてもえやえ
 おもむ多治さう **玉警書** 交らむんとおもむきて
 苦一節におほしれと **後叢系** 三つり一はち
 もむ多治もさるさう **著** 三つり一はち
 三つり一はち **思** いふれくるん **中** 公

とやどおのじやうとらひかえりていふと

たむじら

〔祭〕舒字徐字とちありたよふ
ると同じし

たむじす

そをすくと音便小とていふ
本居宣長去聲字三音考小

〔継體紀〕

二ウ勿論貴賤但重其心同烈

臣恒所重

たむさま

〔注〕同今音十才師の信やそ
下信小お月せそ平草を焼後ヤキニヒに

さそて取を思ふさまに會計けり

たりのあま

〔続後拾〕一西園寺公経今
子人のとふとてなりなり思ふ

のひまのそ

たりのさま

思ふ様なり〔拾遺〕秋さよ更て
天の川ををりてみる思ふさま

れもやそを渡ると〔新纂〕輕中さ良祝三多の
ねの驚かすすいねとてに思ふさまを成るるを

たもや

〔祭〕西振の祭成し〔神代記〕下從容

語曰

おとまりひ

從。つきたる仙臺 **若菜** 上三四三六

ちよみおとまりひせぬらもちよみ

おとまり

祭 日本紀に可憐をいふ遊仙窟
風流をいふ雲皇紀新撰字鏡

小憐と云々可憐也心樂也と注せり古語拾遺小日
神の天岩屋をいふ也後人皆收して西皇

と云ひしに延るといふ **万** 西上三八 裕毛忌路伎

中をいふ也さそをいふ也 **同** 西下廿三 けりふにわはりも **尺** 寸と云

可憐オホシロクのいふふも **金** 兼上西 兼上西 兼上西

君を説らんしつりりそ **同** 尺のいふ也 **檢**

五條傳のいふいふのいふ也 **同** 尺のいふ也 **同**

おもむき

西をいふ也 **方** 十下 六上

みらぐらえぬはも **同** 尺のいふ也 **同**

おもひす

思ひ出すをいふ也 **字** 拾七 十六方 男

思ふらんとすをいふ也 **同** 尺のいふ也 **同**

金 兼上西 兼上西 兼上西

してあをさふらう **新集** 雑下 源朝太郎

月をあしほのちに梅う思ひききとて手とあはれ

たのしいね

思ひききぬれもよ思ひほめ終
まをふ文ふえねんしあぬえ

わく えずりとしつと国と又俗にぬらわれ

ゆとを国とあしほ又梅に世向上に思入ると

ふゆと俗てあしほにたにけしむる万葉のさしよ

いしつらうとしつと奇もあぬれしにねは思入

にとしつとあしほを思ひて思入ぬるとあぬえり **拾** 冬

あしほあしほあしほあしほあしほあしほあしほあしほ

あしほあしほ **上音書** 思入 思入 思入 思入 思入

一 思入たるを思入すりしとらけりるまはけりしとみ

十 思入一思入の思入を思入しとみ

思入思入思入思入思入思入思入思入思入思入

こととりし思入の思入を思入しとみ **思入**

思入思入思入思入思入思入思入思入思入思入

思入 **万** 思入思入思入思入思入思入思入思入思入思入

思入思入思入思入思入思入思入思入思入思入

思入 思入思入思入思入思入思入思入思入思入思入

思入 思入思入思入思入思入思入思入思入思入思入

草思いたるの **新古今** 忘四

大史公宗母 **新古今** 忘四

思ひ流ると **新古今** 忘四

たゆみ

拙 思ひ流る物を流る事に
流る中に人をこころする事のみ

こころと事なる **古** 忘四

すか川割かせに **古** 忘四

忘れ **新古今** 忘四
山ありの色に **新古今** 忘四
玉吟 上行宗 **新古今** 忘四

深く思ひを **新古今** 忘四

去御門院 **新古今** 忘四

とたぬ人 **新古今** 忘四

新古今 忘四

思ひを **新古今** 忘四

ぬんた **新古今** 忘四

次小大自本車にしては、
三乗を説て虎生の株を調て板一木乗を
況ふたどく、火完を思ひの家とらむ
拾芥の中に牛の車のやう、せばおひの家
いそあや

おひの

壬生 上乗 板へて思ひの家
わけてゆきあひも及ず板の松

おひの本

金 忘下 俊彩 忘茶 板あや
ゆきそこれに思ひのきりお

おひの

拾芥外 下 忘茶 板へて思ひの家
小のえ括る思ひの新芽に

思ひの

拾芥外 上 今とて略も
小のえ括る思ひの新芽に

思ひの

拾芥外 上 今とて略も
小のえ括る思ひの新芽に

おひは

拾芥外 上 今とて略も
小のえ括る思ひの新芽に

おひは

拾芥外 上 今とて略も
小のえ括る思ひの新芽に

おひは

拾芥外 上 今とて略も
小のえ括る思ひの新芽に

思ひ

拾芥外 上 今とて略も
小のえ括る思ひの新芽に

んこそすれよ

思ひくまはし

玉敷

十九

云はは緒に

思ひやりのなをとふささう

け詞も物言にぬ一奇に後撰云三つ方に
之歸れつて思ふよその思ひくまれく人のちり
やけ下句まそふうし思ひやりとさくつれり
某初く物言はせにさ事れく思のすめさ
にまじいさ事さ一十載集「思ひくまはし」も
年のへぬ某思ひころせ秋の月のまはさく
いて思ひ降つる思の隈もさる中か後らに思
にもまじい思「思れと又年正に思れてれ

とも程方のうちを恨を思ひやりの

やまのうらふとくさるやうにもさる地也

心の底に義守半やうにさるも五

云の中へ隠る事やうに人の何うとくどの

まは英之海氏の影りもさる也

よとく

まおのいんまはまをとみりく

くま人の中へさる物言あをれにしぬめや

をさるぬる

まはし

やと笑はし

下

るにむすまふまされまらむと思ひくま
あるにけれ、**穂角六**、**思**い年移くの時
んもたそあれ、是らぬ方サ世思ふ
新子

おひやる

彼方に思ひを寄来り、**五**、**柱**下
おひやる、この白く、らなと

とむすまふまに、えぬ、りを移す、**古**、**おひ**
やると、この途に来やする、まふ、ゆあちにあふ
く、のち、**新**、**旅**、たひ、さ、ぬ、都、も、長、河、所
あて、思ひ、やれ、も、い、か、い、と、ふ、い、と、**新**、**子**、**持**、**申**、**か**、**い**
り、と、ん、世、に、い、か、て、ら、す、ま、ふ、い、と、い、い、れ、も、あ

ぬ、を、**新**、**古**、冬、と、そ、い、る、念、あ、と、も、ち、う、

けり、**新**、**古**、か、り、わ、あ、て、思ひ、やれ、も、

おひやる

思ひを寄く、て、**新**、**古**、**思**、**ひ**、**を**、**寄**、**来**、**り**
古、**思**、**ひ**、**を**、**寄**、**来**、**り**、**新**、**古**、**思**、**ひ**、**を**、**寄**、**来**、**り**

ぬ、り、し、思ひ、やれ、も、い、か、い、と、ふ、い、と、**万**、**一**、**長**、**系**

枕、**持**、**申**、**か**、**い**、あれ、い、思ひ、を、い、つ、**同**、**二**

卒、**三**、**長**、**系**、**思**、**ひ**、**を**、**寄**、**来**、**り**、十、年、の、一、年、も、思ひ、や、る、心、も、あ

れ、や、と、云、く、

おひやる

思像、**持**、**申**、**か**、**い**、の、**新**、**古**、**思**、**ひ**、**を**、**寄**、**来**、**り**、**後**、**三**、**長**、**系**
る、あ、ら、い、て、か、い、ぬ、人、**持**、**申**、**か**、**い**、や

り、つ、**新**、**古**、**思**、**ひ**、**を**、**寄**、**来**、**り**、**拾**、**持**、**申**、**か**、**い**、**新**、**古**、**思**、**ひ**、**を**、**寄**、**来**、**り**、**安**、**あ**

ねの橋を思いやりてやま成くらさん **全生**
下さいしさいさいみぬ崎の山里に思いやりに
すむふりして

おもしやれ 思いやり流くと人に今一
る涙やれと云ふ家才と忠像

おんせりくとのとせり **平家物語** 思いやれ哲

と思懐たに **信玄** 忠良物と **同** 大酒云

玉照云 思いやれ君が侍之儀のよきとる夜ふ
ぬき袂を **後拾** 十三思いやれ ぬき袂

入方の月より 尔の詠やハある **河合** 思いやれ
夏の水の流るに 製り 松の公 酒子成

おもしやれ **コ** やとーたる事にて何の用
ことしやき 侍 **松** あまき縁に

て何の用と 思案も なまきりせんいとく之傍に

障り **紫** 写五十才 思いやり物 御の手に結れ

いさよらふん **昔** 思いやれいと

おもしやれ **柏木** 思いやれ 思いやれ

く 思いやれ 思いやれ

おもしやれ **桑** 思いやれ 思いやれ

いと 思いやれ 思いやれ

一三三之定家御 尊の奇 秋をこころ 既方の
ついでに心あはるる尊や 志す事一 尊の思
子 **梅** 七 培家卷十 培家の尊とて 既方に 既を
とられ 尊の八幡の燈をわて 功り 志す事
を 既志す事を 載て お羽りも 尊の 尊
この 尊の尊に 既志す事とて 尊を 尊
心に 尊の尊とて 後 尊とて 尊
一 尊の思い 尊の 尊
久た 志す事 尊に 尊

おもひえ

心は得也 **拾玉六** 尊とて 尊
志す事とて 尊とて 尊

物忘れ

おもひで

説初学申 志見申 **打圃** 故
一 尊の思い 尊に 尊

おもひあかる

尊の思い 尊に 尊

おもひあかる

尊の思い 尊に 尊

おもひあかる

尊の思い 尊に 尊

おもひあかる

尊の思い 尊に 尊

あつたにらぬふさそつし(中)

おもいきや

きハ本傳、夕ノゾ、夕ノテアツク、な
と伝す、あつたにやハ思反後、そ

やはや、あひし、折本傳、え、思いきやと、ふ
奇号、殊に、あ、う、け、る、折、あ、い、け、し、る、詞、と
て、や、その、世、に、思、う、す、よ、との、こ、の、あ、ん、り、ま、又
云、思、い、ま、や、ハ、中、に、い、ら、る、む、る、折、本、と、す、と、
の、こ、つ、あ、た、る、の、歌、集、に、す、ま、の、傳、に、と、傳、
る、し、との、奇、の、こ、め、や、**古** 雜、下、思、い、ま、や、ひ
かの、あ、れ、こ、お、と、ろ、く、て、あ、ま、の、な、い、た、あ、い、ま、
せ、ん、と、の、**松** 夜、思、い、ま、や、秋、の、ふ、凡、の、ま、い、ま、

に、嫌、や、ま、い、席、に、い、ら、る、あ、い、ま、**古** 一、思、れ、て

ハ、夢、の、こ、を、思、い、ま、や、さ、ま、ら、し、く、て、君、を
う、ん、と、**土** 上、思、い、ま、や、ん、く、の、君、を、

て、思、ふ、の、あ、く、も、お、ね、い、ら、し、**け**、お、下、に、と、た、と、
を、か、**新** 合、調、の、ぬ、ち、**新** 古、後、年、た、け、

又、い、ま、**一**、と、思、い、ま、や、い、の、ち、ち、う、け、り、さ、ま、の
中、山、凡、思、い、ま、や、と、う、ち、あ、う、に、の、こ、と、

て、地、の、本、に、い、ま、子、又、按、に、下、必、未、來、の、詞、に
て、交、ら、し、と、い、せ、ん、と、い、の、お、也、過、去、現、在、を、

と、い、て、交、ら、す、事、ち、**一**

あつたにらぬふさそつし(中)

たぬい

なごめ

万

五面ウ

女奴の世中思ひ

しめして物

同

三九ウ

いさかよて

世中思ひしめう

おぬい

信言と同

六帖

夢の思ひ

かけぬ世にもあるおれ

金

教上

二徳右大臣

お方 神代のあたりと思ふに

ひまらけぬ後の事

思ひはあぬ

あは脚指折に所不身として

お念「まもない」であるまも

かま「か」とはせう

一万代

家園「く」

とあぬ夕夕夕に市人さわくみわめやまの

と至 友成季 友衣すそ地の草紙や

風にさひとあぬ夕夕夕

思ひも

思ひも

拾遺

一承のり

いふられて

善き心

風流

軽下 意公

はうしをぬるおののうれぬを思ひしれぬ世

思ひも

新古

意西行女の家やうら

かこのよりん

拾

軽急 あり事のかうやういふ

思ひのよの思ひもあぬくみた女に

思ひおはし

新拾 恋三 そのまに新拾はて
迷へ借とさひもはさぬんをわ

思ひもわぬ

新後 頼下 法服行淋はなと
又おしらあやうらうらうと

わらぬやののわらぬち

新和 恋五 ちけきわぬぬる
のまのふらふらしたえぬぬ

思ひもたえぬ

もはるる 恋六 ちけきわぬぬる
のまのふらふらしたえぬぬ

思ひもなぬ

思ひもなぬ

後 恋二 恋のまゆめさ
えさしよさしたぬぬぬら

ぬらぬのぬぬこと

思ひもろぬ

新拾 恋三 かいちやうまにま
してもちかたふ思ひもろぬぬ

思ひもしらぬ

思ひもしらぬ

山家 下 思ひもしらぬぬ
りけれ思ひもしらぬぬ

思ひもしらぬ

新後 頼中 恋三 ちけきわぬぬる
かひもしらぬぬ

思ひもしらぬ

新後 拾 恋三 ちけきわぬぬる
かひもしらぬぬ

